

善隣

No.545 通巻812

2024年（令和6年）3月1日発行（毎月1日発行）

2024

3



一般社団法人 国際善隣協会

善 隣

目 次

2024年 3 月号

公開講演会記録

龍の世界	池上正治	2
パレスチア問題の根源的な解決はあるか —シオニズム運動と訣別したエスペラントの創造者を思いつつ	大類善啓	11
「習一強!」、じつは「習一怯!」では? —国家主席をやめた後の恐怖	田畑光永	20
陶々俳壇	馬場由紀子	29
中国ウォッチング	編・訳 上松玲子	30
協会通信・会員だより・同好会だより		32
2024年 3 月の行事予定		33

— 善 隣 第545号 通巻812号 —

2024 (令和 6) 年 3 月 1 日発行

発行所 〒105-0004 東京都港区新橋 1-5-5
一般社団法人 国際善隣協会

TEL 03 (3573) 3051
FAX 03 (3573) 1783

発行人 藤沼弘一

編 集 原田克子

編集協力 朝 浩之、山谷悦子

印刷所 (有)ゆにおんプレス
TEL 048-834-1201

定価 一部400円 年額4,800円

振替 00120-0-145956

国際標準逐次刊行物 ISSN 0386-0345

©禁無断転載

みんなの写真館

(姜晋如、村田嘉明)

当協会は、中国ならびに近隣諸国
との相互理解を深め、友好親善・交
流を推進しています。

一般社団法人 国際善隣協会

公開講演会記録

龍の世界

はじめに

中国の龍の造形は古く、約6000年前の新石器時代の遺跡や、約3700年前の夏朝の王族の墓などから出土している。

その後、龍のイメージはさらに豊かなものとなる。大自然の中や、人間の思考および生活の中に、様



新石器時代（約6000年前）、玉製の龍

ざまな龍たちが宿ることに。21世紀になって2回目の辰（龍）年を迎えるにあたり、龍の誕生から現況までを考えてみたい。

辰（龍）年は、12年に1回

暦とは、太陽や月を観測し、時の流れの周期性（日・月・年）を明確化したものである。世界四大文明を築いた民族はそれぞれの暦を作っている。この四大文明という表現は、日本や中国など東アジアだけで通用し、西欧などでは「文明のゆりかご」と表現されている。

暦は、数十万年にわたり狩猟・漁労・

作家・翻訳家 池上正治



採集を生業としてきた人類が、約1万年前、新たに農耕社会を築くために必須のチャートだった。中国の暦の最大の特徴は、陰陽と五行^{ごぎょう}を統合したことにある。

具体的には、10の干^{かん}（幹）と12の支^し（枝）を組み合わせ、それに五行（木・火・土・金・水）と陰陽を配し、10と12の最小公倍数である60をひと周りとする。こうした構造（次ページの図）であれば、過去および未来へ無限に遡及することが可能である。やや複雑ではあるが、これを理解しなければ「辰（龍）の年」へと話を進めることができない。

十干	五行	陰陽	十二支	音読み	訓読み	
甲	木	兄	え 子	1 甲子	こうし	きのえね(ずみ)
乙		弟	と 丑	2 乙丑	いっちゅう	きのとうし
丙	火	兄	え 寅	3 丙寅	へいいん	ひのえとら
丁		弟	と 卯	4 丁卯	ていぼう	ひのとう(さぎ)
戊	土	兄	え 辰	5 戊辰	ぼしん	つちのえ たつ
己		弟	と 巳			
庚	金	兄	え 午			
辛		弟	と 羊			
壬	水	兄	え 申			
癸		弟	と 酉	10 癸酉	きゆう	みずのととり
			戌	11 甲戌	こうじゅつ	きのえいぬ
			亥	12 乙亥	いつがい	きのとい(のしし)
				41 甲辰	こうしん	きのえ たつ
				60 癸亥	きが	みずのとい(のしし)
				61 甲子	こうし	

中国の暦は、十干・五行・陰陽・十二支を総合

今年

還暦

「今年のエトは？」
「辰です」という会話をよく耳にする。エトは干支であり、正しくは十干十二支、すなわち天干地支のことで、会話は十二支（地支）に限定したものである。子にネズミを、丑にウシを、辰にタツ（龍）を配当したのは、誰にでも理解できるようにという配慮からである。

完成したのは、1924（大正13）年のこと。この年のエトが甲子（こうしきのえね）であることから、球場の名前が付けられた。

龍は、どう考えられていたか

孔子が「龍のような人間」として賛嘆したのは、老子である。二人が対面する次ページ上段の図のレリーフ（浮彫）が作られたのは、いまから2000年以上前の漢代のこと。儒教と老荘、『論語』と『老子』、それは中国思想界の対極に位置する。孔子がいう「龍」は、老子が自分よりも上という評価であらうか？

楚の憂国詩人・屈原（くつげん）の『離騷（りそう）』に龍が頻出する。例えば、「余がために飛龍を駕（つか）わす」「蛟龍（こうりゅう）を呼びよせ渡し場の橋になつてもらう」など。楚の指導層で讒言にあい、国の将来を憂えた屈原は汨羅（べきら）で入水する。この事件をめぐっては、チマキやドラゴンボートなどの物語があり、今日まで日本でも共有されている。

その龍も、いつしか権力者の占有す



孔子（左）が老子を龍になぞらえた浮彫

るところとなり、龍顔・龍袍などの表現が生まれた。三皇五帝の一人・黄帝は、鼎を作り終えると、龍にのって昇天したという。人祖とされる伏羲と女媧は、ともに人身獣尾。その長い下半身は、大きな蛇すなわち龍を彷彿とさせる。

治水に成功し、夏朝の始祖となった禹を中国では、大禹ないし禹王という。その「禹」という名前の一字の中に、「虫」すなわち龍が隠されている。北方の龍と、南方の鳳とは、中国を代表する二大トーテムであり、両者の融

合の過程そのものが中国の歴史である、という仮説が成り立つかも知れない。

龍は空想上、想像上の動物というのが大方の見方であるが、龍の実在を力説する『龍——一種不明的動物（龍——ある未解明の動物）』（馬小星著、上海社会科学出版社）はなかなかの好著である。

龍は、どう形づくられてきたか

龍骨なるものは、中国の伝統医学の薬材として長らく用いられてきた。清朝の儒臣・王懿榮（1900年没）は、書家としても有名な人。彼にはリウマチの持病があり、龍骨などの薬材を煎じて服用することを日課としていた。ある日、その龍骨の表面にある模様気づいた。絵？ まさか文字？

この龍骨には産地がある。河南省安陽の殷墟である。古代王朝・殷の廢墟、を意味する地名だが、それを真に受ける者は当時、ほとんどいなかった。しかし、王

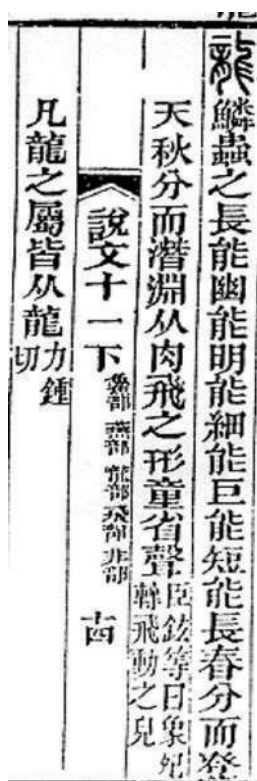
懿榮のこの「発見」を機として発掘が行なわれ、そこが本当に殷の王宮跡であることが実証され、龍骨の模様が「甲骨文字」であると証明されるまでには、一定の時間が必要だった。

筆者がその殷墟を最初に訪れたのは1988年のこと。全国重点文物保护单位（国宝）とはいえ、まだ整備の途上、という印象だった。それから約30年、殷墟はユネスコの世界遺産に登録され、国家5A級観光地となった。甲骨文字を石碑にし、それを並べた「甲骨碑林」は、必見の場である。

さて龍の形状であるが、約6000年前、新石器時代の祭器と思われるも



甲骨文字の石碑をならべれば、甲骨碑林



約2000年前の『説文解字』に解説された龍

だろう。その最たるものに竜巻（トルネード）がありそうだ。見るみる間に飛

みると、自然の地形を巧みに利用し、いかにも強固な構えだった。こうした防壁は、戦国時代、齊（山東省）や晋（山西省）にも作られた。

のから、約4000年前、陶器に画かれた動物とおぼしきもの、約3000年前、青銅器を飾る龍、約2000年前、玉製アクセサリーの龍、その後、唐・元・明・清と時代をへて磁器はより精緻なものとなり、龍はその表面に勇躍することになる。個別の龍については、後ほどまた触れることになる。

特筆すべきことは、約2000年前、

許慎により字書『説文解字』が著わされ、そのなかで龍が解説されたことである。またほぼ同時期、王符の「龍の九似説」により龍のイメージが定着した。かくして龍は、もはや想像上の存在というより、あたかも実在する動物であるかのように認識されることになる。

龍は、どのように自然界に潜むか

大自然の中に超然とした力の存在を認める、それが「龍の発見」だったの

来し、小さな家や動物などを巻きあげ、持ち去ってしまう。

そして長江と黄河に代表される大きな川がある。全長は、長江6380キロ、黄河5464キロ、流域人口は、長江4億5千万人、黄河1億1千万人。どちらも源流から河口まで主な部分を、ほぼ見ているが、これぞ龍である。

そうした龍になぞらえられるのが、万里の長城。その原型は、紀元前7世紀、楚（現在の湖北省・湖南省）に築かれた方城だとされる。そ

こは現在、湖北省ではなく、河南省にあり、楚の国の北の防衛線だったと思われる。現地を歩いて



万里の長城はまさに巨大な「龍」

それを一変させたのが秦の始皇帝である。全国を統一した彼にとり、各国の防壁はもはや無用であり、備えるべきは匈奴に代表される北方騎馬民族である。これが「万里」の長城のスタートである。その事業は後世、漢代や明代でも継続された。長城の主要部分の総計は約1万キロ、支線部分も含めれば、2万キロ超となる。まさに巨大な龍である。

龍門のように、龍のついた地名も少なからずある。山西と陝西の省境にあ

り、登竜門の故事でしられる龍門、雲南省の昆明の西郊外にあり、眺望絶佳の龍門。河南省の洛陽にあり、四大石窟の一つ龍門など。

龍井ロンチンといえば、浙江省の杭州にあり、天下の名泉である。その一帯はまた、銘茶・龍井の産地でもある。

中国の伝統的な地理学では、大地の「気」が流通するルートを龍脈りゅうまつといい、その「気」が湧きでるポイントを龍穴りゅうけつという。地形が山から平地になるあたりなら、龍脈の見当はつけやすい。だが龍穴に関しては、中国で確認したことはなかった。それを日本で二つ確認できた。一つは京都府の伊根であり、二つ目は奈良県の室生だった。伊根の龍穴にそっと腕をいれると、わずかな風の流れが感じられた。

龍は、どう変わってきたのか

龍の形象は、皇帝の住まいから文房具まで、あらゆる所に、変幻自在に現れる。冒頭で触れた石器時代の玉製の龍は、内モンゴルの出土、高さ26センチ。胴体のほぼ中央に穴がある。金属



皇帝専用、大理石の龍の階段は、17m、260トン

を知らない石器時代人が、どのようにして玉（石）に穴を開けたのだろうか？その穴にひもを通し、吊るすと、頭と尾が水平の位置で静止するという。思うに、この玉の龍は祭器の一つだったのではなからうか？

二つ目に紹介したいのは、2002年、河南省で出土した緑松石龍形器である。

夏王朝（紀元前2100〜1600頃）の支配者の墓にあった埋葬品で、2000個以上の緑松石（トルコ石）から成る。これは器というより、私見では、埋葬者を龍に見立て、彼を造形化したものであろう。

小さいながら、精巧に加工された龍

のアクセサリーが流行したのは、2000年前の漢代。支配者たちはそれを腰のあたりに佩び、楽しんだという。なんとも優美なことではある。

建造物に目を転じると、龍の石段、九龍壁、碑林などがある。皇帝の専用、

重さ260トン、大理石の階段は、ピラミッドの石が平均3トンほどだったことを思えば、その巨大さが知れるというもの。運搬は厳冬期、道路に水をまいて凍らせ、その上を滑らせたという。これもまた大した知恵である。

九龍壁は、中国でいう「邪の気」の侵入を防ぐという。山西省・大同にある中国最大の九龍壁は、横45・5、高さ8、厚さ2メートルと雄大で、そこに踊る9匹の龍は雄渾そのものだ。爪の数は、4。

碑林といえば西安。中国の歴史的著述が石に刻まれ、まさに林のように並んでいる。いつも拓本をとる人がおり、墨の香が漂い、パンパンと音が聞こえ

る。一部の石碑の上部にわだかまるのは、^{あまうりよう}魑とよばれる雨龍で、碑石を守る。

手の平にのるほどの銅鏡や、硯などの文房四宝にみる龍たちは、造形美のレベルの高さを主張しているかのようである。

龍は、どのように語られてきたか

言葉のなかの龍に目を向けてみよう。中国でも、日本でもよく使われる四字熟語に「^{がりようてんせい}画龍点睛」がある。これには実在の画家・張僧繇^{ちやうそうよう}がおり、彼が壁画に龍を画いた寺も実在する。物語の真偽のほどは、読者の判断にお任せしよう。

日本では有名だが、中国ではほとんど使われないのが「^{りゆうとうだ}龍頭蛇尾」である。その理由は、思うに、出典が禅宗の問答集『^{へきがんろく}碧巖録』だからだろう。その逆に、中国ではよく使われ、日本では知名度の低いのが「^{りゅうだひどう}龍蛇飛動」である。その意味は、書道の筆づかいが非常に速いこと、ときに書いた本人も

何を書いたか分からなくなる、というもの。

「^{しやう}葉公、龍を好む」もまた日本ではあまり知られていない。葉公は実在した人物であり、楚の国の重鎮であり、孔子とも交友があったと『論語』に書かれている。

その葉公の龍好きは有名だった。屋敷の梁や壁には龍が画かれ、龍の書画の収集も熱心だった。これを聞いた龍は喜び、ある日、天界から下りてきて、葉公の家を孝敬したという。ところが、あれほど龍を熱愛していた葉公が、本



画龍点睛を絵にすれば

物の龍を一目見るなり、「助けて！」と叫んで逃げだしたとか…。

逆鱗^{ぎさりん}の一語は、戦国時代、法家の立場にあった韓非の『韓非子』を出典とする。

いわく「龍という動物は、うまく馴らせば、人がそれに乗れるほど、おとなしい性格であるが、喉の下に直径一尺もある鱗が逆向きにはえている。もし、それに触れようものなら、かみ殺されてしまう」と。逆鱗はまた、君主の性格を暗示した表現でもある。

臥龍^{がりりゆう}とは、大きな才能を秘めながら、活躍のチャンスを待っている人物のこと。

日本でも人気のある「三国志」の諸葛孔明は、その典型である。まだ無名だった諸葛亮を迎えるべく、蜀王の劉備が関羽と張飛をつれて、孝敬すると3回。「三顧の礼」は語りつがれ、その舞台となった湖北省・古隆中に三顧堂がある。

中国は広く、長い歴史があるため、龍が弱者となるケースもある。新疆ウイグル自治区のキジルを訪れたのは1

995年8月のこと。熱砂の砂漠を車でまる一日、300キロ以上走り、緑のオアシスに着いたのは夜8時。安堵感に浸る。

目的の一つが第38窟の壁画に画かれた怪鳥・迦楼羅^{かろうら}と白い龍。この鳥は別名を金翅鳥^{こんじちよう}といい、日本の古い寺院には安置されている。仏教説話によれば、この鳥は羽根を広げれば360万里となり、口からは火を噴き、毎日食べるのが大きな龍1匹と小さな龍500匹：天竺（インド）の話も、中国と同様、氣宇壮大である。

龍は、どう暮らしかかわるか

全部で12ある地支いわゆるエトのなかで、龍（辰）は唯一、空想の動物？である。龍以外の牛や羊など11は全て実在する。そうした理由からか、龍には超然とした力量が感じられると同時に、辰年にはある種の違和感がある。

天変地異が時を選ぶはずもなく、偶然の所産であり、その確率はエトでいえば、12年に1回と考えるべきだ。にもかかわらず、過去の例をあげて警鐘



農暦の正月15日、衆目を集める龍踊り

を鳴らす人もいる。中国人が話題にする「龍の年」がある。毛沢東と周恩来が亡くなった1976年、英国が中国侵略の口実としたアロー号事件の1856年、清朝を衰退させる原因となった1796年の白蓮教徒の乱、唐朝に引導をわたした黄巢の乱が収束した844年など、いずれも辰年なのだ。

その龍と人間の生活の關係に目を向けてみよう。農暦では、1月15日が龍

灯^{トシ}、2月2日が龍抬頭^{ロンタイトウ}、5月10日が分龍節^{フンロンヂェ}である。農暦は新暦（西暦）にくらべ約1か月遅く、正月は新暦の1月下旬から2月初旬あたりだ。今年は、2月10日が農暦の正月。爆竹が鳴りびびき、初めて体験する外国人は仰天し、肝を冷やすだろう。龍灯の別名は、龍踊り。数人から十数人の男たちが、竹の棒に連ねた張り子の龍を、上下左右に踊らせながら、街を練り歩く。江戸時代、これが長崎に伝わり、「蛇踊り」となり、今日まで演じられている。大きな蛇は、龍である。

2月の龍抬頭は農作業の開始を、5月の分龍節は大雨への警戒を、それぞれ内容とする。このように年3回、暦に龍が登場する。

日本にも、行事や暮らしとかかわる龍ないし蛇はかなりいる。青森県・五所川原で夏に行われる「虫送り」がある。それは病虫害の駆除を願う行事だ。白装束の若者たちがかつぐのは、稲わらで作った「虫」で、行列の先頭をいく虫は、どう見ても龍の頭だ。岩木川のとりで、この虫たちに火がつ

けられ、炎上する。大きな虫すなわち龍が、たくさんの虫を率いて天高く、姿を消すようにとの願いがこめられているという。

雨乞い行事の主役は、中国でも日本でも、水の神とされる龍である。日本各地にある雨乞い行事だが、これまで見たなかで一番印象に残るのは、埼玉県鶴ヶ島の脚折雨乞行事だ。脚折は地名である。4年に1回のこの行事をつぶさに取材したのは、2回前の辰年の2000年のこと。長さ36メートル、



龍鍋で庶民の餃子を賞味すれば

重さ3トンの龍蛇りゅうだは竹で骨格を作り、麦わらで頭から尾までを作り、笹の葉で全身をおおう。とにかくデカイ！神職のお祓いの後、約4時間かけて街中を練り歩き、終点の雷電池へ。「雨ふれ！たんじゃく、ここにかかれ黒雲」という掛け声ともに、龍蛇は池のなかで解体される。一場の壮大な雨乞い劇だった。

龍に見たてた小舟を漕ぎ競うドラゴンボートは、中国に源があり、屈原を救出するためだったという。それは日本の各地にも伝わり、沖縄ではハーリー、長崎などではペーロンという。

生活がらみでは、南方の果物の龍眼などがあり、薬材にタツノオトシゴなど、また皇帝が好んで用いたとされる強壮剤に龍菜がある。

最後になるが、餃子は最も庶民的な食品である。その餃子を、北京と西安で、皇帝をイメージさせる龍鍋りゅうなべで賞味したことがある。豆粒ほどの小さい餃子を、ウェイトレスがお碗に入れないわく、「吉祥かぞえ歌」をやってくれる。お碗の餃子が「1つであれば

順風満帆：5つであれば五穀豊穡：0であれば悪いこと無し」と。口福を楽しみながら、耳もまた悦ばせるという食文化に、脱帽！

龍と、類似物、似て非なる物など

古今東西を見わたすと、龍と、類似する物や、似て非なる物が少なからずある。例えば、南アジアのナーガ、中南米のククルカン、欧州のドラゴンとワイバーンなど、以下、それらを簡単に紹介する。

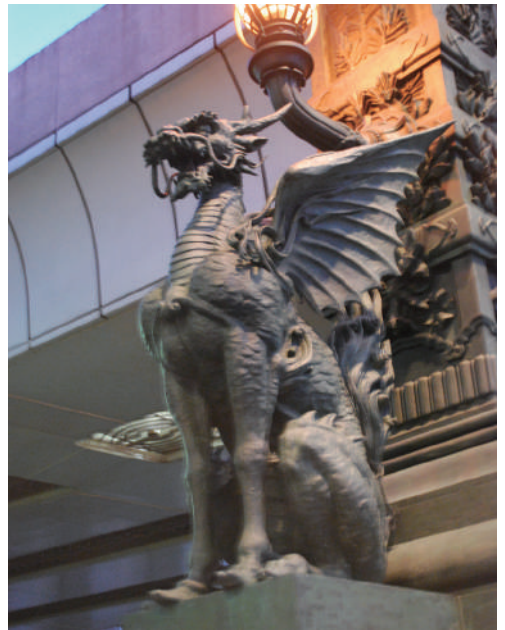
ナーガは本来、古代インドの神話に登場する地中の蛇神である。そのイメージ起源は、一説によれば、大型ワニすなわちクンピーラだという。ナーガはさらにコブラのイメージを加え、現在ではインドよりはむしろ周縁のラオスやタイで、仏陀の守り神となり、建築物の一部となっている。海から宝物が湧きでる「乳海攪拌にゅうかいかくはん」は、ナーガが主役であり、インド文化圏で広く共有されている。

ちなみに四国の霊場・金毘羅こんぴらさんは、クンピーラ信仰の延長線上にある。

中米（メソアメリカ）で、マヤ文明やアステカ文明など、巨大なピラミッドをもつ農業文明が栄えたのは、BC3世紀からAD16世紀のこと。年2回、春分と秋分の日、壮麗なピラミッドに降臨するのが農業神ククルカンである。太陽が沈む瞬間、ピラミッドの長い階段の手すりだけが夕日を浴びて、光り輝く。それがククルカン（羽根をもつ蛇の意）だ。

欧州のドラゴンは、ギリシャ神話の時代から、強大な力をもつ存在だが、火を噴き、人畜に被害をあたえるとして、撃滅される対象である。ゼウスはドラゴンと死闘をやり、ヘラクレスはドラゴンを退治する。キリスト教は4世紀、古代ローマ帝国の版図に広がり、大きな宗教となり、ドラゴンもまた大天使ミカエルらによって撃滅される。ドラゴンには、キリスト教と対立する宗教が投影されているようだ。

このように、欧州のドラゴンは、中国の龍とは全く別の物である。字書など



東京・日本橋のワイバーン

で、ドラゴンは龍、龍はドラゴン、とされることもあるが、明らかな誤りだ。信頼できる字書であれば、ワイバーンを翼龍としている。これは正しい。ワイバーンはドラゴンによく似ているが、大きな違いは翼をもつことだ。さらに大きな違いは、守護という役割をもつこと。例えば、英国のロンドン橋のたもとに立派なワイバーン像があり、橋を守っている。東京・日本橋にもワイバーンの像があることは、あまり知られていない。

おわりに

中国最古の龍の造形は、約6000

年前、新石器時代の玉製の龍であろう。その後、龍のイメージは多様化の一端をたどり、皇宮から庶民の家まで、多種多様の龍が存在する。龍に、幸運や豊作を祈願したりもするが、ときに「暴れ龍」にもなる。龍の国と、その龍を伝える人たちを、これからも注視、観察していきたい。

（2024年1月17日・公開講演会）

筆者略歴（いけがみ・しょうじ）

1946年生まれ、東京外国語大学中国科卒。著書に『氣の不思議』（1991）、『徐福』（2007）、『龍の世界』（2023）など、訳書に『中国科学幻想小説事始』（1990）、『中国養生術の神秘』（1999）など、編著に『中国旅行全書』（1980）、『徐福—アジア2000年の青い鳥』（2003）など、中文書に『一个日本人眼中的中国』（1998）など。著訳編書の総計70余冊。

パレスチナ問題の根源的な解決はあるか

——シオニズム運動と訣別したエスペラントの創造者を思いつ

ほうまさ
方正友好交流の会 理事長 大類善啓（会員）

二〇二三年十月七日、パレスチナのイスラム組織ハマスによるイスラエル攻撃、それに対するイスラエルのパレスチナ・ガザ地区への徹底的な反撃は、世界の目をロシアによるウクライナへの戦争から一挙に、イスラエルとパレスチナとの長年の戦いに向けることとなった。

そして二〇二四年一月八日現在、イスラエルの攻撃はパレスチナ人二万三〇〇〇人ほどの死者を出し、今なお悲惨な状況が進行し続けており、死者数はもっと増えていくだろう。

改めて、イスラエルとパレスチナと

の戦いの根源的な問題とは何だったのかと考えざるを得ない。すると、おのずとイスラエル建国に至る過程にまで遡って考える必要があるだろうと思う。

ユダヤ人とは ユダヤ民族とは…

ユダヤ人たちは離散を余儀なくされてきた、と言われている。二〇〇〇年ほど前、古代ローマ帝国に追放されて以来、「彷徨えるユダヤ人」「放浪するユダヤ人」「差別されるユダヤ人」と同情的に言われ、また近代ヨーロッパにおいても迫害され、それはナチス・

ドイツ時代、頂点に達したと言えるだろう。

六〇〇万人ほどのユダヤ人たちが主にポーランドなどに建設された強制収容所に入れられ亡くなったという。その代表的な収容所であるポーランド・クラコフ近郊のアウシュヴィッツ収容所を訪れたのは、もう半世紀以上前の一九六九年一月だった。訪れたその日の参観者は私一人だったが、酷寒の冬の寒さなどを感じることもなかった。ともかく殺されたユダヤ人たちの髪の毛、歯などを見ながら、改めてユダヤ人たちへの同情心がかき立てられた。

ユダヤ人は、コミュニズムを思想的に生み出したカール・マルクス、精神分析のジークムント・フロイト、相対性原理を発見したアルベルト・アインシュタインなど、数々の思想的、精神的な遺産を世界にもたらした知的巨人を世界に送り出した。そのようなユダヤ人を挙げていけば、思想、文学、音楽分野など、世界の巨人をいくらでも挙げることができるだろう。

「頭のいいユダヤ人」「教育熱心なユダヤ人」などと言われ、またロスチャイルドの名前を思い出し、金融界を牛耳るユダヤ人など、いわば、あらゆる世界で突出した「民族」か「人種」だと思われているかもしれない。誤解を恐れずに言えば、そんなユダヤ人たちがどうしてやすやすとナチス・ドイツに殺されてしまったのだろう。

さて、一口にユダヤ人と言うが、一体どういう人種でどういう民族を言うのだろうか。ユダヤ側からの定義で言えば、ユダヤ人とは「ユダヤ教を信仰する母親から生まれた人間」、あるいは「ユダヤ教に改宗した人間」と通常、

定義づけられている。

我々日本人が思うユダヤ人は、欧米系の白人をイメージするが、それはまったく違う。「ユダヤ人の国」と言われるイスラエルには、ターバンを巻いたインド系やエチオピア系の黒いユダヤ人など多種多様な人々が暮らし、ユダヤ人といえば「驚鼻で白い肌」という通俗的なイメージを連想しがちだが、それはまったく一面的な見方なのである。

後で詳しく紹介するが、イスラエルに何年かいたユダヤ人女性、ルティ・ジョスコビッツは『私のなかの「ユダヤ人」』（一九八九年、三一書房）で「イスラエル国内でさえ、ユダヤ人の定義をめぐって、裁判所と政府とユダヤ教が三つどもえにぶつかり、国会乱入デモが起こったぐらいなのだ」と記しているのだ。

ユダヤ系日本人もいる！

昨年十二月、私はユダヤ教に改宗した日本女性に出会った。彼女はピア

ニストとしてニューヨークで暮らして演奏活動をしている。たまたま東欧のユダヤ系の音楽、クレズマーに関心を持っていた私は、樋上千寿さんが設立したイディッシュ文化振興協会主催のクレズマー音楽を聴かせる小さな会合に出かけた折、ニューヨークからやって来た彼女の話をししばかり聞くことができた。

クレズマー音楽はユダヤ人の結婚式などでは欠かせない音楽なのである。ニューヨークでの彼女の音楽活動の一つは、ユダヤ人の結婚式や披露パーティで演奏されるクレズマー音楽の演奏である。そのような演奏活動で「祈るユダヤ人たち」と接する中、心理的な抵抗もなく彼女はユダヤ教に改宗したのである。そう、ユダヤ系日本人が現にいるのである。いや日系ユダヤ人というのだろうか。

私の知り合いにエレヌという東京に在住するユダヤ人女性がいる。彼女はニューヨークで日本男性と知り合い結婚し日本にやって来た。もう半世紀以上も前のことである。その彼女と縁

があつて少しばかりユダヤ人談義をしたことがあつたが、彼女はニューヨークにいたとき、とりわけユダヤ人意識はなかったと言う。たまたま「イスラエルを旅して、自分がユダヤ人だという意識に目覚めた」と語った。ジューヨークと呼ばれるほどユダヤ人が多いニューヨークの街で暮らしていると、いわば「普通のアメリカ人」としてユダヤ系の出自などを気にすることもなかったのだろう。他にも、同じようなことを私に語った在日ユダヤ人男性もいた。

近代の欧州で差別されてきたユダヤ人

ヒトラー・ナチスを持ち出すまでもなく、ヨーロッパ・キリスト教世界でユダヤ人たちは差別されてきた。

『審判』などの作品で知られるフランツ・カフカという世界的に著名なユダヤ人作家がいた。実存主義の先駆的な作家とも呼ばれるカフカは一八八三年七月、旧オーストリア・ハンガリー

帝国の都市プラハで生まれた。プラハは現在のチェコの首都である。当時のプラハの人口は約四五万人。そのうち約三万四千人がドイツ系で、その何分の一かがドイツ・ユダヤ系だったという。ドイツ・ユダヤ人はチェコ人からはドイツ人として排斥され、ドイツ人からはユダヤ人として差別されてきたという（飯吉光夫『審判』とカフカ）。

ユダヤ人は、なぜ差別されたのか。

いろいろ要因があるだろう。「キリスト殺しのユダヤ人」というのもある。職業制限などを課せられていたユダヤ人だったが、金貸し業など、金融業などにしかつけない制約があり、そして金持ちになっていったユダヤ人への嫉妬が生まれ、それも差別の要因となっただろう。ポーランド出身で、後にイギリスで活躍したユダヤ人のアイザック・ドイッチャーに、『非ユダヤ的ユダヤ人』という著作がある（岩波新書、鈴木一郎訳）。

彼はその中で、「ユダヤ人が一種独特の社会集団として存続してきたのは、かれらがまだ自然経済の中におかれて

いた社会の中にあつて、交換経済を代表してきたからなのであるが、私はこの事実と、一般の人々の心の中に根ざしているその想い出が、少なくとも部分的には、欧州一般がユダヤ人の大虐殺を目撃したとき「ざまみやがれの気持」や冷淡さの原因になっているのだといいたい」と書いている。確かに大いに納得できる説である。

ユダヤ人の国を創ろう

国をもたないが故に差別されるのだと思い、また、そう思ったユダヤ人たちは多くいただろう。古代パレスチナの地から追放されたユダヤ人、それ以降、さまざまな国や地域で生活せざるを得なかったユダヤ人たちが「自分たちの国をもとう」とするのは、自然な感情とも言えるだろう。

「シオンの丘に帰ろう」と思い、考えたユダヤ人たちがシオニズム運動を起こした端緒はまさにここにある。そして、自分たちの国をパレスチナに創ろうとするユダヤ人たちの民族主義的

な運動を最初に「シオニズム」と呼んだのは、一八九〇年、ナタン・ビルンバウムというウィーンに住んでいたユダヤ人ジャーナリストである。

そして一八九七年八月、スイスのバーゼルで開催された第一回シオニスト会議で、シオニズムの目標を「パレスチナの地に、公的に認められ、法的に保障されたユダヤ人のためのホームランドの創設を追及する」と設定した。

しかし、それ以前にも東欧を中心にした各地のユダヤ人の中では、シオニズムの萌芽があったのである。一八八二年にはロシア（現在のウクライナの地）のユダヤ人の大学生ら十数人が「私たちが求めるものは、自分たちの国の中に自分たちの家を持つことである」と宣言してオスマン帝国の一角だったパレスチナの地に移住したという。

そんな各地で起こっていたシオニズム運動を一つの政治運動として提起したのがテオドル・ヘルツルだった。ヘルツルは新聞記者としてパリに駐在していた一八九四年、いわゆるドレフュス事件に出会った。ユダヤ人だったド

レフュスはフランスの砲兵大尉として軍に勤務していたが、軍の機密を漏洩したという疑惑で大した証拠もなく有罪判決を受けた。冤罪だったので、彼は最後には無罪を勝ち取った。

ヘルツルはドレフュス事件で、フランスでも根強いユダヤ人に対する反感を感じ取り、「ユダヤ人はそこに住む国で同化すべきだ」という今までの考えを翻し、ユダヤ人国家の必要性を思ったのである。そして一八九六年、

『ユダヤ人国家』という小冊子を刊行しユダヤ人国家建設の必要性を訴えた。そして翌年、スイスのバーゼルで第一回シオニスト会議を開催したのだった。

この会議には中欧、東欧、ロシアを中心としたユダヤ教の超正統派から無神論者まで、二〇〇人ほどのユダヤ人代表者たちが集まったという。聴衆の中にはユダヤ人以外にも多くいたと言われている。

ヘルツルはウィーンでドイツ語のシオニズム週刊誌を出しながら、オスマン帝国にパレスチナへのユダヤ人大量移民を打診したが失敗した。そして第

六回シオニスト会議では、当時のイギリス領ウガンダに、ユダヤ人国家を建設することを提案したが、大反対にあった。

また後のことだが、パレスチナではなく、アメリカ本土やアフリカのマダガスカルに移住しようという動きもあったという。

シオニズム運動に賛否両論

このシオニズム運動については多くのユダヤ人からは賛意の声が起った。ウィキペディアで調べてみると、ラビ（ユダヤ教の教師、聖職者である）のエマニュエル・ラックマンは、「私はユダヤ教徒（ユダヤ人）であり、シオニストである。私にとってこの二つは切り離せない一つの拠り所である。またこれが、歴史的なユダヤ教の立場であるとも考えている」と語る一方、アラブ側からもシオニズム運動を支持する発言もあるのだった。

一九一九年三月、イラクの国王ファイサル一世は、フェリックス・フラン

クファーターへの手紙でこう書いている。フランクファーターは、ウィーン出身のユダヤ系のアメリカの法学者である。

「私たちアラブ人、特に教育と知識ある者は、シオニズム運動に対して心から共感を覚え、見守っている。(中略) 私たちアラブ人は、ユダヤ人帰還者を心から歓迎する。我々は改革され、さらに改善された中東社会を求め、共に働くつもりである。二つの運動は相補的、また民族的であり、帝国主義的なものとは無縁である。シリアには二つの民族が共存できる余地がある。実際に、どちらか一方が存在しなければ、これは成功する運動ではない。(中略) 私は、私の民族と全く同じように、我々が支持しあうようになろう将来を、楽しみに待っている」。

これは本当に少数派の意見と言っているだろうか。しかしここでのキーワードは、「共存できるか」である。

ユダヤ人側からのシオニズム批判

その一方、ユダヤ側からシオニズム運動に批判的な著名な人物もいる。

『我と汝』という著書で有名な哲学者であるマルティン・ブーバーも初期においてはシオニズム運動に同情的であった。私は大して勉強はしなかったが大学時代は哲学科に属し、ブーバーはとても親しみある哲学者であった。しかし当時はシオニズムとの関係は全く知らなかったが、ブーバーは、精神的・文化的なシオニズムに関して、初期には積極的に擁護していたと言う。しかし、政治的に国家のかたちをとることになれば墮落することになるだろうと考え、徐々に政治的な運動になっていくに従い、その未来に希望を見い出せず批判的になっていったという。そしてこう見ていたのだ。「一九四八年のイスラエルの建国は、七〇万人ものパレスチナ人——現在では九〇万人に近いのではないかと見積もられることも多いが、彼らを正当な故郷から追放することになった」と懸念した。

〈ブーバーに関してはマルティン・ブーバー著『ひとつの土地にふたつの

民 ユダヤ—アラブ問題によせて〉(合田正人訳、みすず書房)などを参考にした。

ユダヤ系知識人のハンナ・アーレントもシオニズムを批判した一人である。アーレントは『全体主義の起源』などの著作で知られ、またナチス・ドイツのユダヤ人迫害の直接的な責任者であったアドルフ・アイヒマンのイスラエルでの一九六一年の裁判を傍聴し、アイヒマンの行動および考えを「凡庸なる悪」と論評したことで有名な女性である。

そのアーレントは、「イスラエルはユダヤ国家であつてはならない。イスラエルが国家暴力をもって土地所有権の主張を合法化する努力については、植民地主義の人種差別形態であり、そのような植民地主義は永久闘争につながりかねない」とみなしていた。

アーレントは一九三〇年代にはシオニズムと一体化していたが、一九七二年のインタビューで、「私は、いかなる集団にも所属していません。シオニストたちは、私がこれまで所属してい

た唯一の集団です。充分におわかりのようにヒトラーゆえに、そうなったのです。ただし、それも一九三三年から一九四三年のあいだけだけです。それ以後、縁を切りました」と語っている。

これらの言葉は、ジュディス・バトラ著『分かれ道―ユダヤ性とシオニズム批判』（青土社）に拠っている。

また、一九八七年に亡くなったイタリア系ユダヤ人、プリモ・レーヴィのようにアウシュヴィッツ収容所から生還したが、イスラエルのパレスチナへの戦いを常に批判していた人間もいたのである。

「シオンの丘に帰る」の根拠はあるのか？

前出の『私のなかの「ユダヤ人」』は、著者ルティ・ジョスコビッツが「私は一体、何者なのだろう」と自己に問いかける、いわば自らのアイデンティティを求めて旅をしたドキュメントである。プロフィールを簡単に紹介すれば、ルティはユダヤ系ポーランド人だった

両親がイスラエルに移住したときに生まれた。一九四九年四月、イスラエルが「建国」されて一年後である。

もう少し詳しく記せば、両親はナチス・ドイツに追われてソ連に行き、シベリアで働き、サマルカンド、パリを経由して一九四九年にイスラエルに移住した。そこで彼女は生まれ、その後、四歳のときに家族と共にフランスへ渡り、十一歳のときにフランス国籍を取得し、十九歳のときにイスラエルを訪れ、そこで日本人男性と知り合い、日本にやって来たという女性である。彼女はその男性と結婚し子どもを二人もうけるが離婚という軌跡を歩んでいる。

日本人から見れば、この歩みだけを見てもドラマティックで波乱に富んでいるように見えるが、「彷徨えるユダヤ人」の仲間から見れば、そう驚くようなことではないかもしれない。

ユダヤ人シオニストの間で成長した少女だった彼女はこう書いている。「ユダヤ人にあらざるものはすべて敵であり、たとえユダヤ人の友だちだという者であっても、彼らがわれわれの

友であるのは束の間にすぎぬから、決して心を許してはならぬと教えられていたのである」。

そうして私が思い出すのは、一九七〇年代半ばだったか、イスラエルに行った友人の言葉である。キブツ（集団農場）で過ごしてから一年後だったか、一時帰国した際に会ったところ彼女は、「イスラエルではユダヤ人以外は人間じゃないのよ」と言い放った。「そうかユダヤ人以外は人間じゃないのか」と思い、常にパレスチナ人を二級市民として扱うイスラエルのユダヤ人の心の中を思った。そのときの彼女の言葉は今でも強く印象に残っている。英語がよくできた彼女はその後イスラエルを去り、ロンドンへ行きイギリス人男性と結婚し双子の男の子をもうけた。

閑話休題。ルティのことである。彼女はイスラエルに住んでいて違和感を持っていたのだが、あるとき、アーサー・ケストラーの『ユダヤ人とは誰か―第十三支族』という本に出会った。

ユダヤ人は「シオンの丘」とは関係ないのだ！

ケストラーはブタペスト生まれのユダヤ人ジャーナリストであり、作家であり哲学者である。彼はこの書で、アシュケナージ系ユダヤ人のルーツは、ユダヤ教に改宗したハザール王国（カザールともいう）の人々だ、と言っていた。

ハザールは七世紀から十世紀にかけてカスピ海の北からコーカサス、黒海沿いに栄えた遊牧民族の国家だったが、キリスト教とイスラム教に挟まれ、生き延びるためにユダヤ教に改宗したと言っているのである。ハザールの人々は、ユダヤの十二支族とは関係なく、政治的な理由でユダヤ教に帰依したのだ。

ユダヤ人には大きく分けて、主に東欧系のアシュケナージ系とポルトガル、スペインなどのスファラディ系があると言われる。ケストラーは、そのアシュケナージ系の祖先こそハザールの人だと言っているのだ。

イスラエルに違和感を持ち、自己のアイデンティティに悩んでいたルティ・ジョスコビッツはこの本を読んで驚いた。彼女はハザールのことを聞いたことがなかった。「少なくともシオニストの編纂したユダヤ史からは、抜け落ちたか、故意に隠されているのだ。それも当然だろう。これが大々的に知れたら、シオニズムは破産するのだから。コーカサスにならともかく、パレスチナに国家を建設する権利など無くなってしまうのだから」と彼女は書く。

パレスチナの地「シオンの丘」というユダヤ人との地域的な結びつき、その根拠はない。「私は自分と「約束の地」の関係がきっぱりと切れたように思えた」と彼女は記している。

我々の仲間ともいうべき有為楠君代は、長野県阿智村にある満蒙開拓平和記念館を訪れたが、そのとき、日本の強引な「満洲国」建国を思いながら、そこに「イスラエル建国」を連想した。『星火方正』二五号、方正友好交流会、二〇一七年十二月発行。

「傀儡国家満洲国」とよく言われる

が、この伝で言えば、イスラエルは「近代欧州と現代アメリカの傀儡国家？」と思いたくなる人もいるのではないかと考えてしまう。

予言者としてのザメンホフ

私は今、マルティン・ブーバーやハナ・アールレントよりもはるか以前に、シオニズム運動と訣別したユダヤ人、ラザロ・ルドヴィーコ・ザメンホフ、そう、世界共通語エスペラントを創造したザメンホフに改めて注目し、彼の先駆的な予言に驚くのである。

一八五九年、ザメンホフは現在のポーランドの東部、当時はロシア帝国の支配下にあったリトアニア領のヴィアリストクに生まれた。ザメンホフは当初からシオニズム運動を支持していたわけではなかった。しかし、ポーランドのワルシャワで一八八一年、ボグロム（ロシア語で大虐殺の意味）を経験した。ここに至ってザメンホフは、やはりパレスチナにユダヤの国を創るしかないと思い、シオニズム運動に参加

したのだ。そしてワルシャワでそのリーダーになった。しかしその過程で、「シオニズムはユダヤ民族の民族主義にすぎない。各国に散らばっているユダヤ人は宗教の他には共通の基盤は何一つない」と思うようになった。

ザメンホフは、パレスチナに住むアラブ系パレスチナ人を追放する形で進行するシオニズム運動に真の解決はない、とシオニズム運動から手を引いたのである。と同時に、シオニズムはユダヤ人問題を解決しないばかりか、ユダヤ人を含めて人類を、友愛で、民主主義的に結びつけるのに大きな弊害、邪魔になると思ったのだった。

ザメンホフの予言は当たった。一九四八年、イスラエルが「建国」宣言を発したと同時にアラブ諸国がイスラエルを攻撃し中東戦争が起った。イギリス政府は第一次世界大戦で協力を得るために外相バルフォアがユダヤ系貴族院議員であるロスチャイルド男爵にシオニズムを支持する旨を伝えた、いわゆるバルフォア宣言を発し、一方でイギリス政府は第一次世界大戦に協力

することを条件にオスマン帝国支配下にあったパレスチナの独立を承認すると表明したりしたことも今日の中東戦争の要因にもなっているのである。

エスペラントについてご関心ある方は、拙著『エスペラント―分断された世界を繋ぐHomaranismo』（批評社）をお読みいただければ嬉しい。

詰まるところ、近代の欧州の国々がナチス・ドイツのユダヤ人虐殺に関して、なにもできなかった痛み、その贖罪意識がイスラエル建国を後押ししたことは間違いないだろう。

前出のドイッチャーは、イスラエル建国運動のとき、アラブ系の人々に、「申し訳ありません。我々の国を創りますので、少し移動してくれませんか」というような謙虚な姿勢で臨めば良かったのだと語っているが、現実、イスラエル建国と同時に周辺のアラブ諸国から戦争を起こされたのだ。

ドイッチャーはまた、「一民族だけの国家などというものはすべて時代錯誤的存在である。どうしてこれがまだ理解されないのでしょうか。原子のエ

ネルギーが日一日と地球を矮小化し、人類は宇宙旅行をはじめ、人工衛星が『大民族国家』の上空を一、二分で飛びまわっている時代になれば、技術的な進歩は民族国家などというものをふるくさい馬鹿ばかしい存在にしてしまうのはわかりきったことではないかと」と記している。

ユダヤ人を超えて世界市民として生きる！

パレスチナ紛争の究極的な解決はあるのだろうか。ユダヤ系知識人たちの中には、ユダヤ人は今住む国に同化して生きることを推奨していたこともあるが、それも一つの生き方である。それには、私はザメンホフが言う人類主義、「我々は人類の一員である」という思想、考え方を多くの人々に理解してもらい、自己を人類人として生きる。言葉を換えて言えば、世界市民の一員として生きることを多くの人々が理解することが前提だろうと思う。空想的だと叱られそうだが、イスラ

エル国家の中に、ネタニヤフ政権のような右派政権ではなく、パレスチナの人々との共存を志向する融和的な政権の誕生を望みたい。はっきりとパレスチナ政権との共存を宣言するイスラエル政権が実現すれば解決できるだろう。しかし、仮に実現したとしても、かつてオスロ合意に調印したラビン首相を暗殺した男が出てくる危険性もあり、現在のネタニヤフ政権のような右翼的な政権が出てくることもあるだろう。そう思うと、楽観は許されないだろう。

ダニエル・バレンボイムを思う

世界的な指揮者であり、ピアニストであるダニエル・バレンボイムはアルゼンチンのブエノスアイレスで一九四二年に生まれた。祖父母は四人ともロシア系のユダヤ人として二〇世紀初頭、ロシアからアルゼンチンに移住した。バレンボイムの両親は、イスラエルが建国されると、とりわけアルゼンチンで差別されていたわけではなかったが、少数派として生きることをやめ、

イスラエルに移住した。

バレンボイムはイスラエル国籍だが、イスラエル政府のパレスチナ政策に批判的であり、イスラエルとパレスチナとの共存を目指すべく、アメリカ在住の思想家でありパレスチナ人として生まれ、その後アメリカで活躍したエドワード・サイードと協力してイスラエルとアラブ諸国の若者を集めてウェストリイスタン・ディヴァンというオーケストラを創設して音楽活動も行っている。またバレンボイムはイスラエル本土での演奏よりもイスラエル占領地区で積極的に演奏活動を行い、パレスチナ側からも好意的に見られている。

彼は『ダニエル・バレンボイム自伝』（音楽之友社、蓑田洋子訳）でこう書いている。

「私は二一世紀が始まった今、アイデンティティは一つだと主張して人々を納得させることは誰にもできないと思う。私たちの時代が抱える問題の一つは、人々がますます小さな、局所的なことにしか関心をもたなくなり、物事がどのように混じり合い、どのよう

に集まって全体の一部となっているか、ほとんど認識していない場合がしばしばあるということだ。（中略）私はアイデンティティの問題を、音楽家として、また同時に、自分が送ってきた人生という観点から見つめている。私の祖父母はロシア系ユダヤ人で、私自身はアルゼンチンで生まれ、イスラエルで育ち、大人になってからは人生の大半をヨーロッパで過ごした。私はその時その時で、たまたま話すことになった言語で考える。またベートーヴェンを指揮するときには自分をドイツ人のように感じるし、ヴェルディを指揮するときにはイタリア人のように感じる。それでも、自分自身に不誠実だという感じはない。それどころかまったく反対である」。

イスラエルとパレスチナとの戦争を思うに、私たちはしっかりと歴史を見つめ直し、先人たちの試行錯誤の歴史を省み、人類の未来を考えるべきだろう。

「習一強!」、じつは「習一怯!」では?

— 国家主席をやめた後の恐怖

田畑光永 (会員)

相次ぐ閣僚辞任、なぜ?

中国の習近平国家主席（以下、敬称略）は2022年秋の第20回中国共産党大会で党トップの総書記に3選され、それを受けて、昨春の人民代表大会（国会にあたる）で国家主席として前例のない3選を果たした。習体制が10年越えの新境地へ走り出したのだが、スタートしてからのこの1年余りの走りっぷりはどうにもギクシャクしていて、私の目には習一強でなくて、「習一怯」と見えてしまう……。

ご記憶と思うが、22年秋の共産党大会の最終日、いざ開会というところ

で、舞台最前列中央の習近平に向かって右隣りに着席していた胡錦濤前国家主席が突然、見ている者には正体不明の人間に腕をとられて退席させられるという一幕があった。まことに奇妙な光景であったが、あの強制退場について共産党からの説明はこれまでのところ一切ない。

ところが、あれから1年以上が過ぎた24年の1月末、胡海峰という胡錦濤の息子が浙江省麗水市という地方都市の共産党委書記（市の最高責任者）から中央政府民生部の副部長（次官）に任命されたというニュースが流れた。1年以上経って、なんとなく退場事件

の手打ちが行われたような感じだが、あの光景の背後の事情は相変わらず不明のままである。

変調はその後も続く。23年6月、前年12月に就任した秦剛外相が表舞台から姿を消し、そのまま1か月ほども経った7月末に解任されたことが発表された。そして不思議なことに外相より一段上の共産党の外交統括責任者に昇格していた王毅前外相が外相職を兼務することが発表された。解任もさることながら、後任は前任者が兼務というのは、外相への昇格待ちの人間が外交部内には大勢いるはずなのに、まるでほかに人材がないようで奇妙で

あった。

ところが本稿を書いているところへ、新外相に秦剛より先輩の劉建超・党中央対外連絡部長が決まりそうだというニュースが流れてきた。なるほど、という人事だが、そう決まったところで、秦剛辞任の謎がとけるわけではない。

外相ばかりではない。23年3月に就任した李尚福国防相も8月末から動静が途絶えたと思ったら、2か月も経過した10月にやっと解任が発表された。これについても事情説明は一切ないまま、年末に至って董軍という前海軍司令が国防相の後任として発令された。

ところが事は国防相の交代人事だけではおさまらなかった。23年末にはさらに、現役を離れて間もない軍幹部OBたちが全人代(国会)の常務委員や政治協商会議(国政助言機関)委員といった現役引退後のセカンド・キャリアを続々解任された。

12月27日には中国航天科技集団の呉燕生会長ら軍需関連企業の幹部3人が政治協商会議委員の資格を取り消さ

れ、29日には李玉超・前ロケット軍司令官、丁来杭・元空軍司令官ら9人が全人代の代表資格を取り消された。ロケット軍関係ではすでに7月に李玉超司令官、周亜寧前司令官が解任されており、李尚福国防相を含めて、大がかりな汚職にでも関係がありそうなのだが、大量解任の背景や理由はやはり一切明らかにされていない。

習近平政権の誕生は2012年11月の第18回共産党大会である。それまでの胡錦濤政権の後、誰をトップにするかについての選考経過は、もちろん、明らかにされていないが、当時は、習体制でナンバー2の首相を10年務め、さきごろ急死した李克強もその有力候補とされていた。では習が最終的にトップを射止めた理由はなにか? 腐敗の広がりにどう対処するかで、より強力な対応を支持したことが決め手となったとの説が流れた。

こういう話の真偽のほどは不明だが、とにかく権力の不正・腐敗が当時、待ったなしの大きな政治課題として中国共産党に突きつけられていたこ

とは確かである。

毛・鄧の時代後に

ここで、建国以来の経済政策を振り返って、習近平が向き合った2010年代の中国経済がどのような状況にあったかを確認しておきたい。

建国の父、毛沢東が直面した中国は長年の戦火を経て、極度に疲弊した国土と国民であった。当時、東西冷戦の中で、中国は西側諸国とは経済援助はもとより貿易さえもほとんどできない境遇にあり、社会主義の祖国であるソ連からもこれというほどの援助はなかった。

革命を進めるのに、階級闘争の理念だけを武器に、それを民衆に説いて、民衆から戦いのエネルギーを引き出すことに成功した毛沢東は、建設においても「以階級闘争為綱(階級闘争が要である)」を抛り所として掲げる以外に方法はなかった。大躍進、人民公社、文化大革命と国民の政治的自覚を資本に経済建設を進めようとしたが、そこからは大きな成果は生まれなかつ

た。革命と建設は別物であった。

次の鄧小平は資本主義を恐れなかった。毛沢東時代には、夏、アイスクリームを自転車で売り歩くのも「資本主義の芽」とされたが、鄧は日本流に言えば「ヤミ屋」「担ぎ屋」の類が小金をためるのを奨励こそすれ、取り締まろうなどとは決してしなかった。外国資本も恐れなかった。土地が欲しければ貸してやれ、人を雇いたければ雇わせろ、生産工場でない食堂でもホテルでも外国人にやらせて構わない、と懷を広げた。

そして広東省、福建省には経済特区が開設され、革命前の租界の復活を連想させた。「昔、尻尾を巻いて逃げて行った外国の資本家が、紙幣で膨れたカバンを抱えて帰ってきた」という戯言が囁かれた。

鄧小平は1960年代の激しいソ連との論争の当時、中国の代表団長としてモスクワに赴き、毛の代弁者として社会主義のあり方をめぐってソ連の「修正主義者たち」と激しく渡り合った論客であった。

そして十数年後、70年代末からの鄧による「改革開放」政策は大成功を収めた。毛の「以階級闘争為綱」に対して、鄧は「発展才是硬道理」（発展こそ第一の道理である）」と喝破した。ありていにいえば「腹が減っては戦はできぬ」である。

技術革新と外貨の流入

今、思えば、当時、世界の経済はまさに大きな技術革新のただ中にあった。早い話、ワープロが登場したと思う間もなく、パソコンが世界中の事務所を占拠し、コピー機、ビデオカメラなどの新製品が世界の風景を変えた時期であった。

この変革の特徴は素人考えを言わせてもらえば、工業生産における熟練技術の存在を小さくし、生産技術の様式化を急速に広めたことだと思う。この時期、中国南部の経済特区に進出した日本その他の国の工場では、最新の自動化された機械を農村から出てきて間もない工員たちが短期間の研修で操作に習熟して、最新型のテレビ、カメラ、パ

ソコンなど人気製品を作っていて驚かされたものであった。鄧小平の果斷が見事に歴史の好機をとらえたわけで、中国経済の拡大がここから始まる。

鄧小平は毛の死後、2年ほどの党内の曲折を経て主導権を握ったのだが、その路線変更を広く納得させる手段の一つは文化大革命の時代に国民が味わった苦難を国民自身に告発させることであった。

「西単（シートン）の壁新聞」という言葉を覚えている人もおられると思うが、「西単」は北京の西長安街に沿った地名で、そこにある長いコンクリートの壁に民衆が文革で味わった苦難を書いて貼り出すことを鄧は黙認した。

それは1978年の秋から翌年の春までの半年足らずであったが、昼夜を問わず壁の前には分厚い人垣ができて、文革中に「批闘」（迫害）に遭った幹部の家族、農村に下放された若者、その他が自らの辛い日々を書き連ねた文章に大勢が目をこらした。

文革の悲劇を大衆に告発させることで、反文革が次の政策路線であること

を浸透させ、この年12月に有名な「11期3中全会」が開かれて、中国の「改革開放」路線への転換が始まったのであった。

それは利己主義を排除した文革路線とは逆に、個人の行商や小商売、地方の村営企業（郷鎮企業）、外資の導入、外国企業が工場を設置するための経済特区など、「金儲け」を公認、というよりむしろ賞揚する政策への転換に正当性を与えた。

この転換は大成功であった。「改革開放」の波に乗って、貧しかった中国が2010年には上海万博を成功させ、GDP総額で日本を抜いて、世界第2位の経済大国へと上り詰めたのだった。

悲劇の種も

この成果をもたらした鄧小平の功績は大きなものがあるが、同時に鄧小平は後の大きな悲劇の種を播いたことに触れておかねばならない。

鄧小平は1978年秋に現れた「西単」の壁新聞を文革路線からの脱却に

利用したと書いたが、それは言論表現の自由にはつながらず、日ならずして民衆の言論は鄧小平の手で押しつぶされてしまったのである。

1979年2月、鄧小平はベトナム懲罰戦争という軍事行動に出た。ベトナムがすでに数世紀も国内に住み着いている華僑を中国へ強制的に送り返してきたことに腹を立てて、ベトナムの北部へ出兵したのである。

そのさなか、某々司令官の部隊が手痛い打撃を受けたという「ニュース」が壁新聞に登場した。それを「軍の機密が漏れた」と腹を立てた鄧小平は、手のひらを返して壁新聞の取り締まりに転じたのである。

鄧小平の改革開放政策も、こと政治の民主化、言論表現の自由化といった問題では旧態依然たる独裁堅持にすぎないことを明らかにした最初であり、その後、文学の世界でも、学生運動でも、「改革開放」の言論世界への拡大を求める動きとそれを抑えつける動きの衝突が間歇的に発生する。

そしてその行きついた果てが、31

9人（政府発表）の死者を出した1989年の天安門広場での学生デモ鎮圧、「六四惨案」であった。

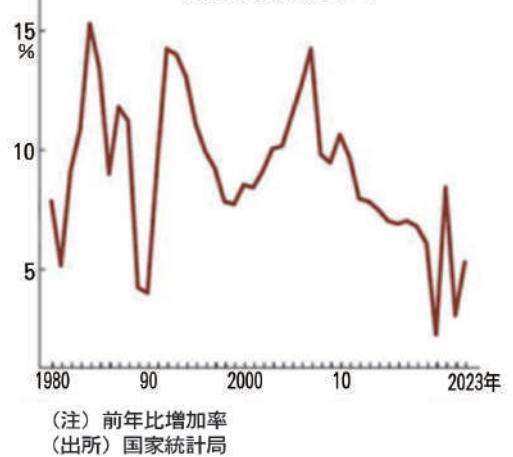
さて、鄧小平時代の「経済発展」を受け継いだのが習近平であるが、習の政治を検討する前に、彼が受け継いだ鄧小平時代の「成果」を確認しておきたい。習近平を理解するために——中国の検索サイト「百度」の記述を見よう。

「新中国成立以来、中国共産党の指導下にわが国経済は急速に発展した。特に改革開放以来の40年に経済発展は快速レーンに入った。GDPを例にとれば、国家統計局に統計のある最初の1952年のわが国のGDPは679・1億元であった。『一窮二白』（空白に近い、の意・引用者）の境地と言っている。

そして、改革初期の1978年でもGDPは3678・7億元であった。それが2020年には100兆元を突破し、101兆5986億元、40余年で275倍に成長したのである」。

それにしても、42年というのは一つ

中国の実質GDP



の区切りとしてはいささか長い。じつは特筆したいのは、この間の1991年から2010年までの後半の20年間である。右のグラフはその間のGDP成長率の推移を年表でたどったものである。1990年の大きな落ち込みは89年の天安門事件で西側から経済制裁を受けた傷跡だが、それから急速に回復してからのざっと20年、成長率は下って上る谷間状の経過をたどるが、全体の水準が高い。つまり成長率が高い。それが2020年直前まで続く。

高度成長の20年

この間、2007年に14・2%を記録したのを筆頭に2桁の成長率を遂げた年が11年、9%台の成長が5年ある。低い方では1999年の7・6%が最低で、それより成長率が低い年はない。2011年以降も成長は続くが、以前ほどの勢いはなくなり、徐々に減速する。表の右端の変動はコロナ禍の反映である。

その間の1人当たり所得の増え方はどうか。1991年は人口が11・58億人、GDPは2億1781・5万元、1人当たりでは1881元である。まだまだ貧しい。それが2010年では人口が13・4億人、GDPは40億1512・8万元、1人当たりでは29964元。20年で1人あたり所得は1991年比15・9倍となった。

習近平政権が発足するのは2012年秋であるが、この年はGDPが51億9322万元、人口が13・54億人で1人当たりGDPは3万8355元に増えている。このあたりの中国経済の成長ぶりは目を見張らせる。

しかし、これほどの成長はいくらな

んでも自己増殖だけでは不可能である。その間、莫大な外部からの資金投入が続いたからこそ実現した成長である。外国資本の投資はもとより多額に上ったが、そのほか在外華僑からの投資や送金、日本のODAのような外国からの公的資金などが成長する中国に殺到した。

その吸引力の源はといえば、鄧小平が残した対外開放政策にはかならない。中国の地代や労働コストの相対的安さに加えて、税制上の優遇、さらに中国市場それ自体の圧倒的大きさ、これらすべてが外資を引き付け、中国経済を膨張させた。

金儲けの修羅場

それでは、当時、前代未聞の投資戦争、儲け戦争の現場はどういう状況であったのか。外からは容易にうかがい知ることはできないが、ここである書物の一部を引用させてもらおう。

「そのころの中国は混乱の時代で、政府機関同士が、土地や、資源、免許などを巡って争っていた。異常な経済

成長のために、あらゆることに大きく金絡んでいたのだ。競合する国有電話会社同士が、理屈の上では同じ国有企业だというのに、互いに相手の電話線を引き抜く。不動産開発の権利を巡って、官僚がごろつきを雇って相手方のごろつきに対抗する。ライバルのバス製造会社が、省を越えて暴力団を送り込み、相手を拉致する。そういうことがまかり通っていた」。

これは2000年代の初め、有力政治幹部の家族に取り入ったある夫婦が、いったんは資本を手に入れ、事業で成功するが、結局、夫人はどこかへ拉致されて行方不明、夫は息子と英国へ逃亡という結末を迎えたその体験を書いた回想録の一部である(デズモンド・シャム『レッド・ルーレット』草思社、145頁)。

中国経済に外資というエネルギーが大規模に注がれたことで、生産、流通、金融それぞれ動きが急速に活発化し、肥大し、ぶつかり合い、各所に傷跡が残ったさまが理解できる。一党独裁の中国では自由世界の国々の経済活

動と違って、生産、流通、金融を担う各企業、各機関が根っこでは中国共産党の組織につながっている。逆に言えばなかなか他人同士のすつきりした対立にならず、党内の序列、関係に利害が絡んだ葛藤が生まれ、党内の力関係が経済でもものを言うことになる。

習近平が総書記に就任したのはそういう混乱の真っ盛りの時期であった。総書記に就任した後、翌13年1月に習近平は「トラもハエも同時に叩く」、つまり大物も小物も汚職犯を取り締まるという方針を打ち出した。当時、「不反腐亡党、反腐亡国」(腐敗を退治しなければ、共産党は亡びる。しかし退治すれば、国が亡びる(役人がいなくなるから))という言葉が流行るほどに、腐敗が社会にはびこっていたから、「トラもハエも」は国民に受けた。そして「掛け声倒れではないぞ」とばかりに、トップに立った習近平は、取り締まりも「そこまでは無理」が常識だった大物、前期の中央政治局常務委員、つまり直前までトップ・グループの一員で、しかも政法(司法・検

察)担当だった周永康という大物をあえて反腐敗のやり玉に上げた。これは「刑不上大夫」(お偉いさんは罪に問われない)という庶民の常識を覆した。習はさらに軍の最高幹部2人(郭伯雄、徐才厚)、前期の共産党中央事務局のトップ(令計画)、そして大行政区のトップ(孫政才)と、それまで取り締まりの及ばないところに安住していると思われる「大トラ」に続々、反腐敗の法網をかぶせて、獄に送り込んだ。

それは確かに快挙であった。そして反腐敗の矛先はもちろん、中・下層幹部にも及んだ。習近平治世の最初の2期、10年(2013〜22)の間に反腐敗で起訴された件数、人数は483万件、471万人に及んだ。単純に日割り計算すれば、1日当たり全国で1320件余、人数にして1290人余の腐敗案件が法廷に持ち込まれたわけである。いくら中国は広く、人口が多いといっても、この数字には驚かされる。同時にこの習近平の腐敗狩りは新しい矛盾を生んだ。先に「不反腐亡党、

「反腐亡国」という言葉を紹介したが、これは言い得て妙で、中国の腐敗は「反腐亡国」の域にまで達していた。つまり反腐を徹底すれば、まさに国が危うくなるところにまで深刻化していたのである。

習近平が反腐の第一矢を前執行部の司法・検察担当の周永康に放ったことが暗示するように、腐敗といっても中国の場合、ある企業が仕事を有利に運ぶために関係する官僚や政治家に賄賂を渡すといった事例はほとんど報道されない。もちろん、そういう事例もたくさんあるのだが、同時に多いのは公的機関の日常業務の中で授受される、言わねば半ば公然たる「ヤミ手数料」のごときものである。

私が直接、中国人の知人から聞いたほんのささやかな事例だが、たとえば庶民の会社や商店が地元政府から補助金などがもらえると、当事者の手に渡る前にまず係の役人がなにがしかの「手数料」のごとき額を当然のように天引きしてしまう。それに異を唱えれば支給そのものがご破算になる、

腹立たしい限り、という。

それから、軍人志望を途中でやめて民間で働いている人物だが、軍をやめた理由は、とにかく階級を上げてもらうために、せっせと上官に賄賂を貢がなければならなかった。上官はその上の上官に同じことをして、それがずっと上まで続いている、それがいやになった、と。それを聞いて、なんで商売や工事に関係ない軍の最高幹部が2人も捕まったのか、理由が分かった。

これらの例が物語るのは、贈収賄が工事の受注争いといった個別事例における利益の奪い合いのためばかりではなく、妙な言い方だが、補助金を受けたり、普通に昇進するためだったり、当たり前の人事異動だったり、などの場合でも贈収賄が広く行われていたことだ。軍人や司法関係の大物が収賄で捕まるのは、なにも個別の利権などによるだけではなく、職場の慣例のようなものの集積の結果らしい。でなければ、日本流に言えば長官だの次官だのという大物がぞろぞろ巨額の収賄で捕まることの説明がつかない。

さらにそれで分かったのは、習近平が最初に人気を上げた大物摘発にしても、ほかの多くの事例にしても、収賄で大物の名前は出るが、まず贈賄側の名前は出ないわけだ。贈賄側はむしろ被害者にさえ見える。

それがじつは大問題だと私は思う。中国のあまたの役所で広く、なかば公然と贈収賄が行われていれば、まさに「反腐亡国」だ。国がなくなってしまう。

しかし、実際には習政権が大量の腐敗を摘発、処罰したとしても、すべてを摘発しきれぬわけではない。同じことをしても網にかかる人間もいれば、逃げおおせてしまうものもある。すると、結果は不公平にならざるを得ない。これが当然ながら、次の大問題である。

習近平が、国家主席は2期10年までという憲法の規定をあえて廃止してまで長期政権を目指し、居座ろうとしたのは、習自身の引退するべき日が近づくにつれて、彼の時代に罪に落とした人間たち、およびその家族が自らの不運を嘆くとともに、それを指揮した習

に対する恨みを決して忘れないだろうということの重みを痛切に感じ取ったからだとは私は推測している。ひょっとすると、一介の隠居老人として余命を全うできないのでは、という恐怖にとらわれたのではないか。若いころ、父親の習仲勲が失脚していた時期の苦難を知っている習近平が、引退が近づくとともに自分の行為がどれほどの恨みを自らに向けさせたかに気付いて、愕然としただろうことは想像にあまりある。習一強どころではない習一怯である。

滲み出た暗闘

本稿の初めの方で、二人の閣僚のなんともすっきりしない交代、軍の古参幹部が老後のポストから多数クビになった事件に触れたが、それは習に距離を置く勢力が習のポストへの未練とその背後の恐怖を見抜いた上での揺さぶりではなかったか。とくに二閣僚の交代のなんとも煮え切らない経緯は背後の暗闘の存在を強く感じさせる。習近平政権のごたごたは人事だけで

はない。習体制が11年目に入ったということは、新しい5年任期の最高指導部が発足したと同時に、新しい中央委員205人、同候補約171人が選ばれたということであり、今後5年間、各方面の要職をそれらの人間たちが担うということでもある。

その新体制をうまく運営してゆくために慣例となっている行事がある。党大会のほぼ1年後にその期の中央委員会の3回目の総会(第3回中央委員全体会議Ⅱ3中全会)が開かれて、党中央から出されるその期の国政運営の基本方針を討議、決定するのである。

したがって大会後の3回目の中央委員会総会というのは政策の転換や新方針の決定といった重要な節目の舞台となることが多い。たとえば先に触れた文化大革命時代から改革开放路線へと方針の大転換が決まったのは鄧小平が主導した1978年12月の第11期3中全会であった、というように。

そこで昨年は、習近平が従来の慣例を破って10年を越えて続投したからには、それなりに新しい路線か、少なく

とも新しい姿勢くらいは明らかにするものと予想された。ところがさっぱりそんな気配もないままに秋も終わり、11年目に入った政権の意気込みも目標も明らかにしないままに年を越してしまった。なんとも拍子抜けであった。

年末にはほかにも毎年恒例の別の重要会議がある。中央経済工作会议がその一つで、これにはトップの習近平以下、中央政治局常務委員という最高幹部7人全員が出席して、翌年の経済の最高指導方針を決めるのが慣例である。2023年のそれは12月12日に開かれた。そして冒頭、習近平が演説した。新華社が流したその記事は中国語で4724文字というかなり長いものであった。

ところが驚いた。経済についての演説を伝える記事であるのに、数字がいっさい見えないのである。まさかと思っただけで見返してもやはり見えない。アラビア数字が見えるのは2023、2024という年号と、途中箇条書きになる部分の、1から9まで項目の頭にふってある数字だけである。

なんだか冗談ではないかとさえ思った。経済を数字抜きで議論してみようという。しかし、そんなわけではないから、閣僚たちの解任についてなにも説明しなかったのと同じで余計なことは言わない姿勢であろう。したがって、重点項目にしても「国内需要を着実に増やす」とか、「高水準の対外開放を拡大する」とか、数字なしのスローガンを並べているだけである。

そして、奇妙かつおかしかったのは、(ここをニュースにしているメディアもあったが)「経済の宣伝と世論誘導を強め、中国経済光明論(明るい中国経済)を高らかに唱えよ(唱響)」という部分である。こんなことを正直に言ってしまう、真面目なニュースや解説も宣伝と思われるまいではないか。

習一怏の時代

確かに今、中国経済は大変だ。昨年のGDP成長率は前年比5・2%増、まあまあというところだが、なにより重くのしかかっているのは、周知の不

動産不況である。かつての住宅バブルの後遺症が重くのしかかる上に人口減少が重なり、今のところ明るい兆しは全く見えない。それどころか、工事が途中でとまってしまった無数の物件が各地に林立したまま、大手不動産がぎざぎざ経営不振、デフォルトに陥るなど危機が迫っている。

しかし、政府にもこれという妙策はない。今のところ、せいぜいが購入条件(支払期間を延ばすなど)を緩めて、低所得層にも買いやすくなった程度の対策しかなさそうで、打つ手に窮している。いつまでも放っておくわけにはいかないのは分かっている。打つ手がないとすれば、せめて「中国経済光明論を唱響しろ」と号令をかけるのも無理からざるところかもしれない。

こうして一強体制を確立するはずだった習政権3期目の滑りだしは、あちこちはみ出るボロを必死に隠しながら、なるべく何事もないような顔で、余計なことは言わずに過ごした1年であった。しかし、春には否応なしに全国人民代表大会が待っている。習一強

か習一怏か、やがて誰の目にもはっきりするはずだ。

できれば2035年まで、可能なら生ある限り現職のままで、という執念が習近平をとらえて離さないとするれば彼はどう出るか。誰にも文句を言わせない大きな勲章が欲しい。建国75年も達成できていない台湾統一が残された唯一の勲章かもしれない。

「台湾統一は歴史の必然である」と習近平は言い出した。どういう手段を用いようと、必然を実現する行動なら正しいはずとやりたいのだろうか。

しかし、必然なら75年もかからずに実現していたはずだ。僭越ながら習近平氏にひとつご教示申し上げたい。世界に必然は一つではない。「専制から民主制へ」も大きな必然だ。中国がいつまでも時代遅れの「プロレタリア独裁」にしがみついているだけで、共産党独裁をやめて民主主義国家へ脱皮すれば、黙っていても統一は実現する。いかが？

陶々俳壇

陶陶句会
結果
2023年10月

兼題 「染まる」

馬場由紀子

わが庭の今宵良夜や石灯籠

橋本紅杓

◎正子

月が明るい。月光に石灯籠が浮かび上がりまことに美しい。

◎由紀子

幽玄な雰囲気漂ってます。

魂抜けてさすらひ舞ふや秋の蝶

〃

◎明良

我が家の柑橘系の灌木に驚くほどの青虫がいるのを見つけた。昔やってきたアゲハチョウの幼虫です。若葉は無惨に食べつくされていますが、鳥に食べられぬようにネットをかぶせました。寒波が来る前に羽化することを願っています。

◎善一

◎京

クルド語の解体現場秋高し

松島二三四

◎紅杓

クルド人は国家を持たずトルコ、イラン、イラク、シリアなどにまたがって住んでいる山岳民族である。トルコ共和国では差別や迫害の対象になっており、トルコと日本の短期滞在の査証（ビザ）免除を利用して来日し難民申請している在日クルド人も多い。埼玉県の川口市や蕨市に多く住んでいる、建設業や飲食業で働く人が少なくないという。中東の情勢が日本に及ぼしている影響の一端を捉えた時事俳句である。

◎由紀子

日本で働いて国に送金しているのだろっか、あるいは逃げてきたのだろっか。「クルド語」の措辞が叙しくもあるが、季語の「秋高し」に未来に希望を託すような明るさを感じる。

握り飯冷めてまたよし今年米

〃

◎善一

今年収穫した米を今年米という。故里福島よりいつも送ってくるその美味さは格別である。確かに冷めても握り飯にしたものは美味しい。

◎正子

力強い新米賛歌です。

◎正堂

栗の毬つまみ上げてる小さな手

〃

◎正堂

幼子が小さな指先でいがの先をつまみ上げて見せて立っている様か思い浮かぶ句なり。

梨食みて山車引きし頃蘇る

日野正子

◎明良

二十世紀梨も大きい梨ですが、最近見た梨は赤ん坊の頭ほどあり驚きました。二十一世紀になったことをしみじみ感じました。私も大きな梨を食べながら山陰の祖母を思い出しました。

●由紀子

「梨食むや山車引きし頃蘇る」かな。

●正子

長十郎でした。

満月や米炊き上がり光りをり

〃

◎明良

月見と食べ物が重なるのは私も一緒です。昔の月見団子は美味かった。

◎京

リフレインが効いてますね。すっごく共感します。

スタッフと熊本弁で交流や

上野京

◎由紀子 「爽秋やケアスタッフの熊本弁」としたい。

この暑さど吹く風やホームなり

〃

◎由紀子

作者の芯にあるユーモアと逞しさが伝わっている。

杉玉を新たに掲げ新酒売る

大内善一

◎京

お酒は飲めないのですが、この句は季節感があってお酒を作ってる方々のよつこびが伝わってくるような気がします。

◎紅杓 飲めないけど惹かれます。

新蕎麦を刈るや磐梯雲払ふ

〃

◎正子

佳い景色です。

◎由紀子

蕎麦の実りを磐梯山も喜んでるかのようだ。

運動会爺のふる手をシカトせり

瀬崎明良

◎正子

孫にも事情が……。

◎京

●由紀子 孫は集中しているのです。

名月が川面に歪み流れ行き

〃

◎紅杓

◎正堂

●由紀子 「名月や川面に歪み流れ行き」とすれば俳句になる。

伝令のごとく先行く飛蝗かな

馬場由紀子

◎紅杓

東北の田園地帯を想像します。

◎正子

イナゴではなくバッタで良かった。

◎明良

大陸の飛蝗は集団で何もかも食べつくすようですが、数匹の飛蝗が草むらさを飛ぶのは楽しい秋の風情です。

◎善一

日本の米は旨かる稲雀

〃

◎正子

日本のお米の味は世界一です。

◎善一

※秋の季語「秋刀魚」

細長いスタイルに、鱗が銀色に光っているところを刀身になぞらえた「秋刀魚」。今年は、まあ高い。先日魚屋で一尾七百六十円で売られていました。庶民には手が出ません。この先このような状況が続けば、秋刀魚の句もニュアンスが変わってくるかもしれませんね。庶民の味の秋刀魚でした、

そこからより秋刀魚の焼かれから音 加藤楸邨
このよつな街があったら高級住宅街ですね。

中国

ウエッチング

編・訳 上松玲子

悪習は絶つべき

先日、江蘇省啓東市で新郎が花嫁を迎えに来た際、迎える車列の先頭車のタイヤに数十個の錠が掛けられ、外すかわりに鍵2個につきたばこ1カートンを要求されたという事件が伝えられたが、地元政府はその後、これは新郎新婦の友人や親戚が盛り上げるためにしたこと、たばこを要求してはいないと発表した。

花嫁を迎えて婚礼に向かう道中で新郎新婦が道行く人に「喜煙」「喜糖」つまりお祝い

のタバコや飴を配る風習は今も多く地域で受け継がれている。幸せのお裾分けにと、一袋の飴、数本のタバコをねだる人もいる。これは祝福や喜びの表現だ。しかし、実際これをビジネスチャンスと捉えている人もいる。ニュースでは「年中婚礼の車の前にひざまずいて邪魔をし、200元もの金を要求する男」や「道路を占拠して婚礼の車を妨害。タバコ5カートンでもどかず」「婚礼の車妨害で金を要求。7人拘束」など慶事の風習に乗じた多くの事件が報道されている。

誰しも晴れの日に揉め事は避けたいと思うものだ。その気持ちにつけこみ、金品の提供を強要することは法律に触れる可能性がある。公共の場で騒乱を起こし、他人を追いかけて、侮辱、脅迫、強要、占拠、損壊するのも犯罪だ。結婚式を主催する側も旧来

の考え方のままでよいのかどうかを見直し、自身の合法的権利は毅然として守るべきであるし、関係部門も法に基づいて厳しく処罰するべきである。

『工人日報』2023年12月9日

人が住む文化財に配慮を

北京市東城区の帽児胡同35号と37号は清朝最後の皇帝、愛新覺羅溥儀の皇后、婉容が嫁ぐ前に住んでいたところで、35号は「旧宅園」とも呼ばれている。報道によれば、先頃、入り口に設置された歴史的文化財であることを示すパネルが赤いペンキとセメントで塗り潰された上、「個人の住宅につき、参観・撮影お断り」という文字が書かれていたという。ドアには中国語と英語で、「個人宅への無断侵入した者は責任をとることにあります」と書かれている。こうした文面からは、押し寄せる

観光客に住民たちがいかに迷惑しているかが想像できる。

インターネットで検索すれば、様々な旅行情報サイトでの胡同周辺はぜひ訪れ、写真を残すべきスポットとして紹介されている。歴史的人物の住居跡も多く、昔の北京の面影があちこちに残っている。また、婉容は悲劇的な人物として人々を引きつける。しかし、住民の気持ちとしたら、たとえ悪意はなくとも、知らぬ人に日常生活を覗かれたくはないはずだ。

観光消費は以前にも増して、その内容や情感が重視される時代になった。そうした中、住民と観光客の対立関係を解消するにはやはり、文化財保護部門と現地の行政担当者の連携が必要だ。住民のプライバシーや静かに暮らす権利を住民自ら主張せざるを得ない状況はおかしい。行政が見学お断りの掲示を出すと同時に、

観光客のためにミニ博物館や展示室などを開設して、古い写真や調度品など当時の雰囲気がかかるものを展示することもできるのではないか。

『北京晩報』2023年12月15日

露天商に財産を譲る

2020年、上海市宝山区の王さんは3百万人民元の価値がある自分の不動産を屋台で果物売る劉さんに譲った。だが、王さんが亡くなった後、遺族は遺産の分配に同意せず、劉さんは王さんの妹はじめ遺族を訴えた。

劉さんによれば、王さんは妻と一人息子に相次いで先立たれ、一人になってから誰も世話をしてくれる人がいなかった。そんな時に劉さん一家と親しくなり、信頼関係ができ、劉さんの娘にも愛着をもつようになった王さんは、2017年8月に遺贈契約を締結したのだという。内容は、劉さ

んは王さんの生活支援、介護と葬儀の義務を負い、王さんは不動産と銀行預金を劉さんに遺贈するというものだ。2019年3月、劉さんと妻は王さんの後見人として日常生活と医療の支援、代理の責任を負う「後見契約」を結び公正証書手続きをした。

劉さんによれば、王さんは2017年より亡くなるまで、劉さん一家と同居し、王さんの介護と死後整理は劉さん夫婦が担ったという。

これに対して、王さんの親族の言い分はこうだ。劉さんは王さんに精神的問題があることを知っていて、行動もままならない彼と契約を結んだ。その目的は彼の財産で、悪意が明確だというのだ。

第一審で裁判所は契約書の内容も、公正手続きも法律に則ったものと認定した。2021年5月に王さんが制限行為能力者と宣告されたとはい

え、遺贈契約がなされた時点ですでに行為能力に問題があったという明確な証拠がなく、したがって契約は法律的効力を持つと認められた。

裁判所は被相続人の意志と財産処分権は尊重されるべきとし、王さんの不動産および室内のすべてのもの、銀行預金残高とその利息も含めて劉さんに帰属するとした。

『光明ネット』2023年12月17日

警官に憧れすぎて

2023年3月、上海市黄浦公安分局の交通警察が交通事故処理をしていたとき、警察の制服と装備を着用した2人の若い男を見かけた。顔つきが幼いこと、行動に不審な点が見られたことから、指令センターに報告。調査の結果2人は警官ではなく、しかも未成年であることがわかった。本人たちが語ったことによれば、警察官になりたくてイン

ターネット通販で警察の制服や装備を購入し、それを身に付けて街に「出動」していたのだという。

同月、黄浦公安分局は早速捜査を開始した。そして2人が制服などを購入したインターネット店を特定。店の経営者張は、警察装備を違法に売買した罪で5月に広州で逮捕され、上海に移送された。

その後の調べにより、張は2020年5月から23年3月までの間、インターネットで2千本以上の警察ベルト、総額10万元以上を売っていたことがわかり、他4人が共犯として捕まった。張は懲役8か月、罰金3万元、他の4人は6か月の拘留と5千元の罰金の判決を受けた。

『新民晩報』2023年12月22日



◆令和5年度第10回理事会の議題（1月18日開催）

今月は下記内容で審議を行った。

・確認事項

12月21日に開催された第9回理事会の議事録（案）が確認された。

・報告事項

①昨年12月25～29日に来日した「中国山西省植林訪日団」への国際交流委員会の対応は無事に完了した。

②委員会報告（定例報告）

③事務局報告

・1月11日（木）に30名の参加で「新年互礼会」が4年ぶりに開催された。

・令和6年度の会議日程案の説明があった。

・来年度の事業計画について、各委員会に対して原稿提出を依頼した。

（事務局長 竹前栄男）

会員だより

◎訃報

井上充氏（89歳）

令和5年12月4日逝去

謹んで哀悼の意を表します

同好会だより

〈俳句会〉

毎月第2水曜日午後1時からオンラインでの俳句会を開催しています。メンバー募集中です。

〈謡曲会〉

松本千俊先生のお稽古は一人ずつの個人指導です。興味のある方は事務局までご連絡ください。

みんなの写真館

ポルトガル中央運河（表紙）

この写真はポルトガル中部にあるアヴェイロという町に流れる中央運河です。アヴェイロはコインブラとポルトの間に位置し、ポルトガルのベネチアといわれる美しい町です。19世紀頃から、漁業と畜産業が盛んでしたので、その肥料用の海藻を集めたのは写真の右側にあるカラフルなモリセイロという弓のような船です。船体は鮮やかな絵で美しく飾られています。現在はアヴェイロのシンボルとして、運河に彩りを添えています。川沿いに並ぶ美しい家々が水面に映り、モリセイロが浮かんでいる光景は確かにベネチアを連想させられます。

（姜晋如）

北京市の新庁舎が並ぶ新しい街並み（表4上）

2023年10月山西省訪中

団に加わった。北京亮馬河飯店（大使館近く）に3泊したあとの個人行動日に北京地鉄10号線「呼家楼」で乗り換え、6号線終点駅の手前「東夏園」で下車し、友人が勤務する北京市・発展計画委員会ビルに向かう。その途中の新庁舎が並ぶ北京副都心の一角で足を止めた。晩秋、紅葉の街路樹がきれいだったからだ。北京市の行政機能は2019年11月に、市内東城区から北京市副都心・通州区に移転した。

（村田嘉明）

北京首都国際空港の美しい夕焼け（表4下）

2023年10月22日、中国国際航空CA182便で17時に北京首都空港に到着した。入国審査場に向かう途中たまたま外に眼を向けると、駐機している飛行機と空港ビル間に「美しい夕焼け」を発見し、一瞬の風景を捉えた。

（村田嘉明）

2024年3月の行事予定

- 7日（木） 14：00 公開 第28回対面&オンライン講演会
「COP28UAE 会合の概要と今後の課題」
前川伸也氏（地球産業文化研究所〈GISPRI〉地球環境対策部部長）
- 12日（火） 14：00 謡曲会（松木千俊先生お稽古）
- 13日（水） 13：00 俳句会
兼題「連翹」及び当季雑詠から5句を投句（2月末までに）
- 14日（木） 14：00 公開 第29回対面&オンライン講演会
「不条理を生き抜いて」
藤沼敏子氏（元上智社会福祉専門学校・植草学園短期大学講師）
- 15日（金） 14：00 公開【21世紀アジア塾】〈旧【善隣中国塾】〉（対面のみ）
世話人：伊大知重男氏・村瀬廣氏（当会会員）
- 22日（金） 15：00 公開 第30回対面&オンライン講演会
「洋上風力をめぐる国際秩序」（仮題）
兼原敦子氏（上智大学教授）
- 28日（木） 14：00 公開 第31回対面&オンライン講演会
「揺れるアメリカ暮らしの中から見える人と社会」
佐藤嘉信氏（パナソニックホールディングス㈱ 終身客員、当会会員）

3月の会議予定

<u>1日（金） 13：00</u> 諮問会（第4回）	13日（水） <u>16：00</u> 財政委員会
5日（火） 13：00 国際交流委員会	<u>14日（木） 15：30</u> 東北委員会
12日（火） 13：00 環境委員会	21日（木） 13：00 理事会（第12回）
<u>12日（火） 14：00</u> 講演委員会（Zoom）	21日（木） 15：30 広報委員会

※下線は通常日程に変更あり。

【4月初めの講演会予定】

- 4日（木） 14：00 公開 第1回対面&オンライン講演会
「『日中交流の歴史を訪ねて一書画に見える日中交流の精神世界一』
展示会について」
井出亜夫氏（フォーカス・ワン代表理事、当会会員）

みんなの 写真館



INTERNATIONAL GOOD NEIGHBORHOOD ASSOCIATION (IGNA)

<https://www.kokusaizenrin.com>

ISSN 0386-1034
二〇二四年（令和六年）三月一日・毎月一日発行

「善隣」第五四五号（通巻八二二）

発行所

〒一〇五〇〇〇四 東京都港区新橋一五五
一般社団法人 国際善隣協会
電話 〇三三五七三三〇五（番代表）